

日本のオペラ公演2020

—公演データの分析とその考察—

昭和音楽大学オペラ研究所・石田麻子

1. はじめに

2019年版は『日本のオペラ年鑑』が発刊されて25冊目の記念号だった。その中で「日本社会や日本を取り巻く環境の変化とともにオペラがあることを本年鑑のさまざまな記録が語っている」と書いたのだが、まさに2020年は社会構造の大きな変化を目の当たりにして、一層その意を強くすることになった。

また、「おそらく今後は、演奏会でのオペラ公演という形態のみならず、インターネット配信にも言及することが必要となるだろう」と書いた。しかし、まさかこれほど早くそして一気に芸術文化の世界を席卷することになるとは誰も思わなかっただろう。パンデミック以降の一時期はとくに舞台芸術を発信するもっぱらの手法となったし、同時に配信プラットフォームの乱立により、実態把握が困難なほどの広がりを見せるなど、コロナ禍が否応なく新たな展開を生んでいることは間違いない。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（セミ・ステージ形式等の公演）の区分、中止公演への言及【表1】

例年通り、全幕実施されたオペラ公演のうち、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表にそれぞれ区分している。これは歌劇場としての一定の形を整えている大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの座席数だ。座席数の区分が適用できない、小学校や中学校など各学校の校内体育館や講堂などでの公演は、中・小規模公演に分類した。

また2018年版から、総上演回数に加えて

大規模会場でのセミ・ステージ形式や演奏会形式での全幕上演回数と、上演した団体数を積み上げたデータを記載している。

今号は加えて、中止・延期公演を把握できる範囲で取り上げており、表3～表6では、実施発表済の公演の中止・延期回数についても掲載している。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類、中止・延期公演について

（分類について）

オペラ団体の公演、劇場・音楽堂等による公演、学生などが自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演などは「国内団体」公演に、高等教育機関主催の、教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等の運営する研修所による研修成果発表公演は、「教育研究団体」公演に、海外の歌劇場などの来日公演は「海外団体」公演に分類している。今号は、中止・延期公演も一部数字をまとめて表に記載している。「教育研究団体」は、若手アーティストや学生を教育する場として継続的なあり方に着目したもので、学生プロジェクトなどは「国内団体」公演とした。

（団体数について）

劇場や団体が、他劇場や他団体と共同制作を実施した公演等は、当該組織が単独で実施した公演とは区別したうえで、別団体とした。さらに同じ団体が組んだ相手を変えて共同制作した場合も別団体として区別しているのも従来どおりである。

表1 分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載）

	1. 国内団体	2. 教育研究団体	3. 海外団体	中止公演
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○	表3～表6該当 団体のうち 発表分のみ
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○	
C表：セミ・ステージ形式等	図1のみ○（総上演回数＋大規模会場でのセミ・ステージ形式全幕上演等）			

図1 総上演回数と活動団体数の推移

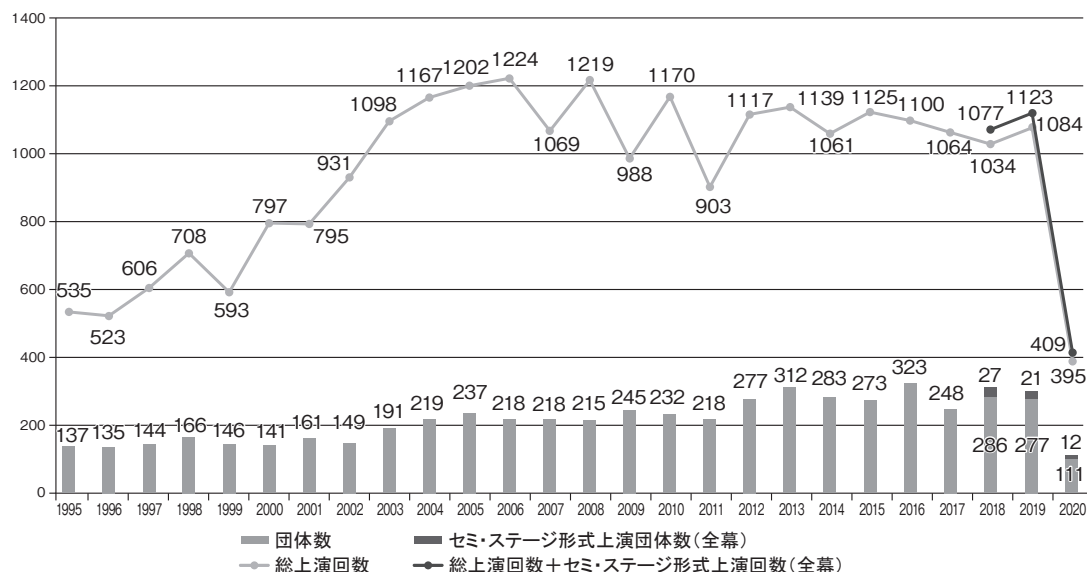


表2 2020年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A. 大規模会場（756席以上）			B. 中・小規模会場（756席未満）			合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数*	総上演回数
1. 国内団体	31	125	1. 国内団体	76	256	1. 国内団体	102	381
2. 教育研究団体	4	7	2. 教育研究団体	4	5	2. 教育研究団体	8	12
3. 海外団体	1	1	3. 海外団体	1	1	3. 海外団体	1	2
合計／総団体数・総上演回数	36	133/395	合計／総団体数・総上演回数	81	262 /395	合計	111	395

*団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

2. 日本のオペラ公演2020年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1】

2020年は、A表とB表をあわせた総上演回数が395回と、前年の1,084回から60%以上の減少となった。

前述のとおり図1のグラフには、上演形態の拡大傾向を勘案して、大規模会場でのセミ・ステージ形式公演、あるいは演奏会形式公演の数字を加えている。これにはハイライ

トや抜粋形式での公演は含まず、全幕上演のみの数字である。2020年は、総上演回数395回＋セミ・ステージ形式等上演回数14回で合計409回となった。

上演団体数は、2019年は277団体だったが、2020年は111団体に減少、さらにセミ・ステージ形式で開催した団体は12となった。コロナ禍のなかでの公演は各組織の努力なくしては成立し得ない。このような環境下で実

施された公演の一つひとつの重みは数字の多寡での評価には代えられないものがある。各活動の軌跡にも思いをはせながらの作業となった。

2-2. カテゴリー別オペラ上演団体活動状況【表2】

表2は、全幕・全曲の完全な舞台上演のみを分析対象としている。

大規模会場での公演は、2015年の505回から2019年は379回と継続的に減少しており、2020年は133回とさらに前年の3分の1近い数字まで減少した。このうち新型コロナウイルス感染症が拡大する前の1月から3月19日までの2か月半ほどの間に57回の公演がおこなわれていて、コロナ禍の真最中である8月9日以降12月までの間には76回公演を数えた。

一方で、中・小規模会場での公演は、2015年以降は630回前後で推移、2019年は705回と大きく増加していたのが、2020年は262回となった。中・小規模会場の公演は緊急事態宣言の前まで、あるいは解除の間を縫っておこなわれており、1月から3月22日までに95回、7月11日から12月までに167回が記録されている。

各地のオペラ団体や劇場・音楽堂などによる国内団体の上演は、大規模会場では31団体125回、中・小規模会場で76団体256回、合計102団体381回が記録された。

教育研究団体は、2019年は21団体による44回だったが、2020年は8団体による12回となった。

海外団体は、2020年は1団体の2公演のみにとどまっている。

いずれのカテゴリーも大幅な減少となった。

2-3. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3では、2020年に大規模会場で4回以上の公演実施した国内団体の活動についてまと

めている。東京二期会と日本オペラ振興会の2団体は、自らがおこなう大規模会場での上演回数も多く、さらに大規模な共同制作公演にも歌手や合唱団人材を提供するなど、日本のオペラ界をつくってきた団体である。2020年も日本のオペラシーンをリードする役割をになった。

東京二期会は、前年からの国内共同制作事業《カルメン》2回を1月に実施、2月の《椿姫》4回を実施したところでコロナ禍が蔓延していく。《サムソンとデリラ》(セミ・ステージ形式)2回と《ルル》3回は延期となった。それ以外の公演は、演出を変更するなどの対応をしながら実施されている。

コロナ禍後に最初の公演となったのは、《フィデリオ》の4回公演で、新国立劇場、藤原歌劇団の各合唱団との連携による公演である。深作健太の演出により、舞台上のソーシャル・ディスタンスを強く意識、歌手たちの演技、入場者数も制限のうえで実施された。日生劇場での《メリー・ウィドー》も客席数が制限されたことから、プレビュー公演と題して上演回数を1回追加、合計5回公演をおこなった。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団と日本オペラ協会の2つの事業部による公演をそれぞれ実施した。

コロナ禍前の1月に日本オペラ協会が《紅天女》をBunkamuraオーチャードホールで5回、藤原歌劇団は2月に《リゴレット》を東京文化会館で2回、愛知県芸術劇場で1回の合計3回がコロナ禍前におこなわれた。

パンデミック後最初のプロフェッショナル団体による大規模公演は、藤原歌劇団による《カルメン》だった。8月に川崎市のテアトロ・ジューリオ・ショウワで3回上演されている。巡回公演の《助けて、助けて、宇宙人がやってきた!》は5回公演を実施、3回が中止となった。

表3 2020年の国内団体公演・中止および延期公演データ*1

団体名	上演作品	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		合計	中止・延期公演					
		上演回数	合計	上演回数	合計		中止・延期	合計				
オペラシアター こんにやく座*2	アルレッキーノ—二人の主人を一度に持つと—	18	26	3	77	103	4	87				
	ネズミの涙	3		1			21					
	おぐりとしてて	2		0			6					
	森は生きている	3		25			19					
	イワンのばか	0		8			0					
	タンギーまほうをかけられた舌—	0		30			8					
	末摘花	0		10			0					
	口はロボットの口	0		0			20					
	銀の口バ	0		0			9					
東京二期会	カルメン*3	2	19	0	0	19	0	3【2】				
	椿姫	4										
	フィデリオ	4										
	トゥーランドット*4	4					【2】					
	メリー・ウィドー	5										
	サムソンとデリラ（セミ・ステージ形式）	0										
	ルル	0					3					
藤原歌劇団*5	リゴレット	3	6	0	5	16	0	7				
	カルメン	3					2					
	ジュリエッタとロメオ	0					3					
	助けて、助けて、宇宙人がやって来た！	0		5			1					
	蝶々夫人	0		0			0					
日本オペラ協会	紅天女	5	5	0	0		0					
	キュウリに求婚	0					1					
日生劇場*6	セビリアの理髪師	0	【5】	0	0	【5】	9	11				
	フィガロの結婚	0					2					
	【ルチア〜あるいはある花嫁の悲劇〜】（90分版）	【5】					0		0			
滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール	こうもり	4	4	0	0	4	0	13				
	神々の黄昏	0					2					
	泣いた赤鬼						1					
	ジャンニ・スキッキ						1					
	竹取物語*7						6					
	セビリアの理髪師						3					
上位5団体合計上演回数／ 総上演回数		—	60/133	—	82/262	142/395	121	121				

*1 大規模会場で10回以上の上演を予定していた団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。さらに今年は中止・延期となった公演は演奏会形式等もリストに入れている。

*2 オペラシアターこんにやく座オペラ塾公演は除く。

*3 《カルメン》は、共同制作舞台で、札幌文化芸術劇場 hitaruでの2回公演である。

*4 《トゥーランドット》は、共同制作舞台で、神奈川県民ホールで2回、iichiko 総合文化センター、やまぎん県民ホールの合計4回である。

*5 藤原歌劇団と日本オペラ協会は、(公財)日本オペラ振興会内のオペラ団体。

*6 日生劇場による《セビリアの理髪師》(中止)の公演はびわ湖ホール2回と愛知県芸術劇場1回での3回は除く、《フィガロの結婚》(延期)は藤原歌劇団との共催公演、《ルチア〜あるいはある花嫁の悲劇〜》(90分版)は短縮版のため、大規模会場公演には従来は入れていないが、2020年は参考公演として記載した。東京二期会との《メリー・ウィドー》は提携公演のため日生劇場公演には入れていない。

*7 《竹取物語》は6回のうち、4回がびわ湖ホール、2回が新国立劇場での上演予定だった。

藤原歌劇団は2018年度から「ベルカント
オペラ フェスティバル イン ジャパン」と題し、ヴァッレ・ディトリア音楽祭（イタリ

ア・プーリア州マルティーナ・フランカでの
音楽祭）との提携公演を開始、新機軸を打ち
出してきた。12月にはヴァッカーイ作曲の

表4-1 2020年新国立劇場主催のオペラ公演と中止公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	中止・延期	公演タイトル	特記事項
1～2月	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	5	0	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	全4幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
2月	セビリアの理髪師	G. ロッシーニ	5	0	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	全2幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
3月	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	0	4	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	全2幕 / 日本語・英語字幕付原語上演 / 中止
4月	ジュリオ・チェザレ	G. ヘンデル	0	3	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	新制作 / 全3幕 / 日本語・英語字幕付原語上演 / 中止（練習過程を配信）
4月	ホフマン物語	J. オッフェンバック	0	4	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	全5幕 / 日本語・英語字幕付原語上演 / 中止
5月	サロメ	R. シュトラウス	0	4	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ	全1幕 / 日本語・英語字幕付原語上演 / 中止
6月	ニュルンベルクのマイスタージンガー	R. ワーグナー	0	4	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2019/2020 シーズンオペラ オペラ夏の祭典2019-20 Japan ↔ Tokyo ↔ World	新制作 / 全3幕 / 日本語・英語字幕付原語上演 この他、東京文化会館（2回）兵庫県立芸術文化センター（1回）での合計7公演すべて中止
7月	夕鶴	團 伊玖磨	0	6	「日本博」参画プロジェクト 2020 新国フェス～とどけ！舞台の魔法～ 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2020	全1幕 / 日本語・英語字幕付 / 中止
7月	竹取物語	沼尻 竜典	0	2	beyond2020 プログラム 2020 新国フェス～とどけ！舞台の魔法～ 新国立劇場 地域招聘オペラ公演 びわ湖ホール	主催：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール / 新国立劇場 全5景 / 日本語・英語字幕付 / 中止
8月	Super Angels	渋谷 慶一郎	0	2	令和2年度文化庁日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業 beyond2020 プログラム 子どもたちとアンドロイドが創る新しいオペラ	主催：文化庁 / (独)日本芸術文化振興会 / (公財)新国立劇場運営財団 初演 / 全1幕 / 日本語・英語字幕付日本語上演 / 延期
10月	夏の夜の夢	B. ブリテン	5	0	令和2年度(第75回)文化庁芸術祭主催公演 beyond2020 プログラム 新国立劇場 2020/2021 シーズン開幕公演	主催：文化庁芸術祭執行委員会 / 新国立劇場 新制作 / 全3幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
11月	アルマゲドンの夢	藤倉 大	4	0	文化庁委託事業「令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業」 令和2年度(第75回)文化庁芸術祭協賛公演 beyond 2020 プログラム 新国立劇場 2020/2021 シーズンオペラ	主催：文化庁 / 新国立劇場 初演 / 新制作 / 全9場 / 日本語・英語字幕付原語（英語）上演
11～12月	こうもり	J. シュトラウスⅡ世	5	0	令和2年度(第75回)文化庁芸術祭主催公演 beyond2020 プログラム 新国立劇場 2020/2021 シーズンオペラ	主催：文化庁芸術祭執行委員会 / 新国立劇場 全3幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
—	5作品 (8作品中止)	5人 (8人中止)	24/133	29	—	—

表4-2 2020年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	中止・延期	公演タイトル	特記事項
10月	魔笛	W.A.モーツァルト	2	0	令和2年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室 2020	主催：京都市 / ロームシアター京都（（公財）京都市音楽芸術文化振興財団） / 新国立劇場 全2幕 / 字幕付原語上演
12月	こうもり	J.シュトラウスⅡ世	2	0	令和2年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業	主催：札幌市 / （公財）札幌市芸術文化財団（札幌文化芸術劇場 hitaru） 全3幕 / 字幕付原語上演
—	2作品	2人	4/133	0	—	—

《ジュリエッタとロメオ》を予定していたが、歌手たちの来日が適わなかったことから中止となった。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ2020」と題して、《セビリアの理髪師》7回の学校公演を予定していたのが中止となる。これらの公演は、中学生や高校生を招待してのもの。同劇場は同じ演目を一般観客向けの「NISSAY OPERA 2020」として上演予定だったが、その2回公演も中止となった。藤原歌劇団との共催《フィガロの結婚》2回公演は中止のうえ、藤原歌劇団が2021年1月に別会場で単独実施している。さらに「ニッセイ名作シリーズ2020」で予定していた《ランメルモールのルチア》を《ルチア～あるいはある花嫁の悲劇～》と改題して90分版に短縮、一般公演2回で公演したうえで配信もおこなった。同時に「ニッセイ名作シリーズ2020」として、中学生・高校生を対象にした無料招待公演を3回実施した。これらの公演は全幕版ではないため、表3には参考として掲載した。

オペラシアターこんにゃく座は、2020年も例年とほぼ同数の190回の公演が予定されていた。緊急事態宣言前に最後まで大規模公演を実施、7月の早い段階から公演をいち早く再開した団体の一つだが、中止・延期となった公演が87回あり、大幅に合計公演回数

を減らす結果となった。

びわ湖ホールは、コロナ禍の前には、びわ湖ホール声楽アンサンブルなど若手を中心としたキャスティングにより中村敬一演出の《こうもり》を4回公演した。これが2020年におこなわれた同劇場の唯一の有観客でのオペラ公演となる。芸術監督の沼尻竜典指揮で《神々の黄昏》を2回上演する予定だったが無観客公演となった。これは、2017年から「びわ湖ホール プロデュースオペラ」としてミヒャエル・ハンペ演出で継続してきた「ニーベルングの指環」の最終夜である。

表4-1と4-2では、新国立劇場の公演をまとめた。新国立劇場は、新制作が5つ予定されていた。2019/2020シーズンは、2020東京オリンピック・パラリンピックの年として、数多くの文化プログラムが展開される予定となっていた。そのなかには4月の《ジュリオ・チェーザレ》、さらに特に大規模な舞台公演となる予定だった6月の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、8月の渋谷慶一郎作曲による新作《Super Angels》が含まれていたが、これらはいずれも中止または延期となった。

2020/2021シーズンが10月に開始、シーズン最初のプログラムは、新制作の《夏の夜の夢》5回公演だった。同公演以降は藤倉大作曲の新作《アルマゲドンの夢》4回、再演の《こうもり》5回が実施されている。

表5 2020年の教育研究団体公演活動データ^{*1}

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		実施公演	中止・延期
			上演回数	合計	上演回数	合計		
大阪音楽大学	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2	0
国立音楽大学	皇帝ティートの慈悲	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2	0
昭和音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2	0
焼津中央高等学校合唱部	仮面舞踏会	G.ヴェルディ	0	0	0	0	0	4
新国立劇場オペラ研修所	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	0	0	0	0	0	3
洗足学園大学	魔笛	W.A.モーツァルト	0	0	0	0	0	2
東京藝術大学	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	0	0	0	0	0	2
3団体(4団体中止)	3作品(4作品中止)	1人(2人中止)	—	6/133	—	0/262	6/395	11

*1 大規模会場で、教育研究型公演の開催あるいは計画が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含まない。

表6-1 2020年海外団体^{*1}の公演活動データ (A.大規模会場)

形態 ^{*2}	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	中止・延期 ^{*3}	開催都市数
その他	1月	ルクセンブルク	ルクセンブルク市立劇場	サイレンス	A.デスプラ	1	1	0	1
巡回	6月	イタリア	パレルモ・マッシモ劇場	ナブッコ	G.ヴェルディ	0	0	4	3
				ノルマ	V.ベッリーニ			3	2
拠点	9月	イタリア	ミラノ・スカラ座	トスカ	G.ブッチーニ	0	0	4	1
				椿姫	G.ヴェルディ			4	1
その他	9月	ドイツ	アウグスブルク歌劇場	ソラリス	藤倉大	0	0	2	1
巡回	11月	イタリア	バーリ歌劇場	アイーダ	G.ヴェルディ	0	0	7	7
—		1ヶ国 (2ヶ国中止)	1団体 (4団体中止)	1作品 (6作品中止)	1人 (4人中止)	1	1/133	24	1都市 (5都市中止)

表6-2 2020年海外団体^{*1}の公演活動データ (B.中・小規模会場)

形態 ^{*2}	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	中止・延期	開催都市数
その他	1月	ルクセンブルク	ルクセンブルク市立劇場	サイレンス	A.デスプラ	1	1	0	1
その他	9月	スイス	バーゼル歌劇場	ムルメリ	—	0	0	12	1
—		1ヶ国 (1ヶ国中止)	1団体 (1団体中止)	1作品 (1作品中止)	—	1	1/262	12	1都市 (1都市中止)

*1 劇場名は、主催者表記に準じる。

*2 形態の分類手法は以下のとおり。

「拠点型」：1回の来日で、4都市以下での公演を行う歌劇場公演。東京23区とそれ以外の東京都内の市は分け、各1都市として区別する。

例：東京文化会館、府中の森芸術劇場での開催の場合、異なる2都市での開催とする。

「巡回型」：1回の来日で、5都市以上で公演を行う歌劇場公演。

「その他」：音楽祭、合唱団などの芸術団体、実行委員会やプロジェクト等による公演。いわゆる歌劇場全体の引越し公演とは異なる形態もある。

*3 中止公演は実施予定が発表済の公演のみを掲載している。そのため公式発表されていなかった公演については収録していない。

10月以降には、2つのプロダクションの劇場外公演がおこなわれた。「高校生のためのオペラ鑑賞教室2020」《魔笛》が2回ロームシアター京都で実施、札幌文化芸術劇場hitaruで《こうもり》が2回上演されている。

された修了公演などがあったほか、8月以降におこなわれた公演もあった。ただし、8月以降に関しては、中止となった大学、研修所公演などもあり、組織ごとに判断が分かれた。

2-5. 海外団体公演【表6-1、6-2】

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、コロナ禍前に実施

海外からの招聘公演で実施できたのは、1月に来日したルクセンブルク市立劇場のデス

表7 2020年オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回
2017年	41人	85作品	607回	54人	83作品	458回	95人	168作品	1065回
2018年	44人	85作品	640回	53人	84作品	394回	97人	169作品	1034回
2019年	50人	103作品	658回	54人	85作品	426回	104人	188作品	1084回
2020年	24人	51作品	179回	27人	41作品	216回	51人	92作品	395回

* () 内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

プラ作曲《サイレンス》のみである。京都と神奈川での1公演ずつ合計2公演が、2020年唯一の記録となった。

それ以外の大型の拠点型公演を予定していたイタリアのミラノ・スカラ座、巡回型公演では、同じくイタリアからの2つの歌劇場、パレルモ・マッシモ劇場、バーリ歌劇場の公演はすべて延期・中止となった。さらに、東京芸術劇場での「サラダ音楽祭」の中で予定されていたアウグスブルク歌劇場制作、藤倉大作曲の《ソラリス》のオペラ版の日本初演、バーゼル歌劇場の《ムルメリ》再演も中止された。表6-1、表6-2では、開催が公式に発表されていた公演の中止情報を掲載している。このほかにも未発表の上演が計画されていた事例もあったと考えられる。

長い間、海外招聘公演によって多くの名演に触れてきた我々日本人の鑑賞環境が、こうして一変することになる。海外の歌劇場などの招聘公演が日本人の鑑賞体験を充実させてきたことは疑う余地がない。招聘公演が一定期間途切れると予測されるなかで、今後日本でのオペラがどのような展開となるのか。自

国の資源をあらためて見つめなおす時が来たと言える。

3. 指揮者と演出家

(指揮者)

2020年に登場した指揮者は、国内外あわせて78人。そのうち、海外から来日した指揮者は8人となった。新国立劇場《こうもり》の11～12月公演のクリストファー・フランク以外には、すべて1月と2月の公演に出演した指揮者たちである。コロナ禍拡大以降の公演には、海外在住の日本人指揮者も国境を越える移動の苦労をしながらかわった。

一方、2020年に指揮する予定だった外国人指揮者は少なくとも25人（そのうち3人は東京・春・音楽祭でのイタリア・オペラ・アカデミー指揮受講生）が公演中止・延期などのため指揮する機会を失っている。なかにはファビオ・ピオンディのように来日していたにもかかわらず直前に公演が中止になった例もある。このほかにも中止されたのはミラノ・スカラ座のズービン・メータ、リッカルド・シャイー、パレルモ・マッシモ劇場のア

ンドレア・バッティストーニなど。東京二期会の《ルル》を予定していたマキシム・パスカル、東京・春・音楽祭のリッカルド・ムーティ、マレク・ヤノフスキなどが指揮する予定の公演も中止や延期となった。指揮者は実演にかかわることが必須となるが、2020年7月には指揮者のジョナサン・ノットがリモート映像により、東京交響楽団の定期演奏会で交響曲を振って大いに話題になった。2020年のオペラ公演では、そうした事例は確認できていない。

(演出家)

2020年は海外の演出家は8人、国内は77の人とグループの名前があがっている。実際に来日したのは新国立劇場の《アルマゲドンの夢》のリディア・シュタイアーなど、一方で来日せず、リモート演出を実施したのは昭和音楽大学による《ドン・ジョヴァンニ》のマルコ・ガンディーニなどがある。

日本人演出家は1月から3月までの公演のほか、7月以降にも公演が記録された。栗國淳が1月の堺シティオペラ《アイダ》や1～2月の新国立劇場《ラ・ボエーム》、中村敬一は1月のびわ湖ホール《こうもり》などで演出をしている。岩田達宗がパンデミック後に藤原歌劇団の8月の《カルメン》、東京文化会館ほかでの《アマールと夜の訪問者》を演出した。公演が実施されても、舞台上の密を避けるため、パネルを自ら動かしながら歌手同士が直接かかわらないように動いたり、衣裳のように見えるマスクを使用したり、フェイスシールドをつけたりするなど、演出手法や歌手の演技にさまざまな工夫が取り入れられた。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2020年は海外の作品上演は179回、51作品と大幅に減少した。日本の作品の上演回数も216回、41作品と2019年の約半数となっている。

4.1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

2020年は《こうもり》が12回で1位になった。びわ湖ホール、新国立劇場などでの上演である。同数の《ラ・ボエーム》は、新国立劇場のシーズン・オペラ公演などのほか、中・小規模会場での公演をオペラ団体が開催したことによる。9位に《アマールと夜の訪問者たち》が入り、そのほかには各作品の上演回数は少ないものの、例年通りの作曲家作品が並んでいる。

4.2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

寺嶋民哉作曲の新作《紅天女》がBunkamura オーチャードホールで5回上演され、藤倉大作曲の《アルマゲドンの夢》は新国立劇場で4回上演された。こうした大規模で新しい創作作品の成果があがった年となった。また中・小規模会場での公演にも萩京子作曲《イワンのばか》などの佳品が生まれている。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図2、表12】

表10にまとめたとおり、2020年は東京が1位、2位に神奈川、3位が大阪と、ほぼ例年通りの状況が見られた。ただし、中止・延期公演が多数となったため、公演開催状況には地域差が出る結果となった。2020年は全国10県で全幕のオペラ公演がおこなわれていないことが記録された。

表11では、大規模会場での公演、中・小規模会場での公演別の実施状況がわかる。

2020年は大規模会場での公演が確認できなかった県が21ある。

表12で、会場別総上演回数を見てみよう。例年最上位となる新国立劇場では、2020年は28回、東京文化会館は6回（中・小規模会場をいれると8回）など、それぞれ極めて少数の公演しかおこなわれていない。

表8-1 2020年に日本で上演された海外のオペラ作品

(大規模会場での上演実績のあるもの、全51作品中・上位10作品、タイトルは便宜的に統一)

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	こうもり	J. シュトラウス二世	12	0	12
1	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	6	6	12
3	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	7	4	11
4	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	3	7	10
5	カルメン	G. ビゼー	7	2	9
6	メリー・ウィドウ	F. レハール	5	3	8
6	魔笛	W.A. モーツァルト	4	4	8
8	椿姫	G. ヴェルディ	7	0	7
9	リゴレット	G. ヴェルディ	3	3	6
9	アマールと夜の訪問者たち	G.C. メノッティ	3	3	6
合計/ 総上演回数	—	—	57/133	32/262	89/395

表8-2 2020年に日本で上演された海外の作曲家 (全24人中、上位5人)

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A. モーツァルト	33
2	G. プッチーニ	26
3	G. ヴェルディ	20
4	G. メノッティ	19
5	J. シュトラウス二世	12
合計/ 総上演回数	—	110/395

表9-1 2020年に国内で上演された日本のオペラ作品 (A. 大規模会場) *大規模会場で、上演回数5回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	アルレッキーノ二人の主人を一度に持つとー	萩 京子	18	1	オペラシアター-こんにやく座	中・小規模会場 で3回公演あり
2	紅天女	寺嶋 民哉	5	1	日本オペラ協会	
合計/総上演回数			23/133	—	—	—

表9-2 2020年に国内で上演された日本のオペラ作品 (B. 中・小規模会場)

*中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	トラの恩返し	李 在浩	33	1	オペレッタ劇団ともしび	
2	タンゲーまほうをかけられた舌ー	萩 京子	30	1	オペラシアター-こんにやく座	
3	森は生きている	林 光	25	1	オペラシアター-こんにやく座	大規模会場 で3回公演あり
合計/総上演回数			88/262	—	—	—

6. 演奏会形式など

演奏会形式やセミ・ステージ形式などの上演記録については、2020年は12団体による全幕14公演が記録されている。

(オーケストラ主催の演奏会形式等上演)

近年、プロフェッショナル・オーケストラが定期公演などで1年に1回程度オペラ作品

をとりあげる傾向がみられるようになってきていた。2020年は東京フィルハーモニー交響楽団がチョン・ミョンフン指揮で《カルメン》、バッハ・コレギウム・ジャパンが鈴木優人指揮で《リナルド》を公演して高評価を受けている。どの企画もコロナ禍を縫って実施、芸術的な成果や、かかわったアーティスト

表10 2020年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	4	7	0	0	0	0	4	7	12
2	青森	1	2	0	0	0	0	1	2	26
3	岩手	0	0	0	0	0	0	0	0	—
4	宮城	1	1	0	0	0	0	1	1	30
5	秋田	2	3	0	0	0	0	2	3	23
6	山形	2	2	0	0	0	0	2	2	26
7	福島	3	6	0	0	0	0	3	6	13
8	茨城	1	1	0	0	0	0	1	1	30
9	栃木	3	3	0	0	0	0	3	3	23
10	群馬	3	8	0	0	0	0	3	8	11
11	埼玉	4	12	0	0	0	0	4	12	6
12	千葉	2	4	0	0	0	0	2	4	17
13	東京	44	133	1	2	0	0	45	135	1
14	神奈川	13	62	2	3	1	1	16	66	2
15	新潟	1	3	0	0	0	0	1	3	23
16	富山	2	6	0	0	0	0	2	6	13
17	石川	3	6	0	0	0	0	3	6	13
18	福井	1	1	0	0	0	0	1	1	30
19	山梨	4	4	0	0	0	0	4	4	17
20	長野	1	10	0	0	0	0	1	10	8
21	岐阜	3	16	0	0	0	0	3	16	5
22	静岡	3	4	0	0	0	0	3	4	17
23	愛知	4	12	0	0	0	0	4	12	6
24	三重	0	0	0	0	0	0	0	0	—
25	滋賀	1	4	0	0	0	0	1	4	17
26	京都	3	5	2	3	1	1	6	9	10
27	大阪	5	18	2	3	0	0	7	21	3
28	兵庫	6	10	0	0	0	0	6	10	8
29	奈良	0	0	0	0	0	0	0	0	—
30	和歌山	1	1	0	0	0	0	1	1	30
31	鳥取	0	0	0	0	0	0	0	0	—
32	島根	0	0	0	0	0	0	0	0	—
33	岡山	1	1	1	1	0	0	2	2	26
34	広島	5	17	0	0	0	0	5	17	4
35	山口	1	1	0	0	0	0	1	1	30
36	徳島	1	1	0	0	0	0	1	1	30
37	香川	0	0	0	0	0	0	0	0	—
38	愛媛	2	5	0	0	0	0	2	5	16
39	高知	0	0	0	0	0	0	0	0	—
40	福岡	2	4	0	0	0	0	2	4	17
41	佐賀	1	1	0	0	0	0	1	1	30
42	長崎	0	0	0	0	0	0	0	0	—
43	熊本	0	0	0	0	0	0	0	0	—
44	大分	1	1	0	0	0	0	1	1	30
45	宮崎	1	2	0	0	0	0	1	2	26
46	鹿児島	2	4	0	0	0	0	2	4	17
47	沖縄	0	0	0	0	0	0	0	0	—
合計	—	—	381	—	12	—	2	—	395	—

表11 2020年の都道府県別・地域別、公演会場規模別分布

都道府県名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		上演回数比率	地域
	会場数	上演回数	会場数	上演回数	総上演回数	
北海道	1	4	2	3	5.32%	北海道・東北
青森	0	0	1	2		
岩手	0	0	0	0		
宮城	0	0	1	1		
秋田	1	1	2	2		
山形	1	1	1	1		
福島	1	1	3	5		
地域合計	4	7	10	14	21	関東
茨城	1	1	0	0		
栃木	1	1	2	2		
群馬	1	1	5	7		
埼玉	2	2	7	10		
千葉	0	0	2	4		
東京	14	57	29	78		
神奈川	13	21	35	45	229	中部・甲信越
地域合計	32	83	80	146		
新潟	2	3	0	0		
富山	1	1	3	5		
石川	1	1	2	5		
福井	1	1	0	0		
山梨	1	1	3	3		
長野	6	8	2	2		
岐阜	0	0	9	16		
静岡	1	1	2	3		
愛知	2	3	6	9	62	関西
地域合計	15	19	27	43		
三重	0	0	0	0		
滋賀	1	4	0	0		
京都	3	4	4	5		
大阪	3	8	8	13		
兵庫	2	3	4	7		
奈良	0	0	0	0		
和歌山	0	0	1	1	45	中国・四国
地域合計	9	19	17	26		
鳥取	0	0	0	0		
島根	0	0	0	0		
岡山	0	0	2	2		
広島	1	2	3	15		
山口	0	0	1	1		
徳島	1	1	0	0		
香川	0	0	0	0		
愛媛	0	0	2	5	26	九州・沖縄
高知	0	0	0	0		
地域合計	2	3	8	23		
福岡	1	1	1	3		
佐賀	0	0	1	1		
長崎	0	0	0	0		
熊本	0	0	0	0		
大分	1	1	0	0		
宮崎	0	0	2	2		
鹿児島	0	0	4	4	12	一
沖縄	0	0	0	0		
地域合計	2	2	8	10	395	
合計	64	133	150	262		

同一館内の複数の会場、同一大学内の複数の会場は、規模別に1カ所とした。

例：新国立劇場オペラ劇場、新国立劇場中劇場は大規模会場で1カ所。

新国立劇場小劇場は中・小規模会場で1カ所。

図2 地域別総上演回数推移（単位・回）

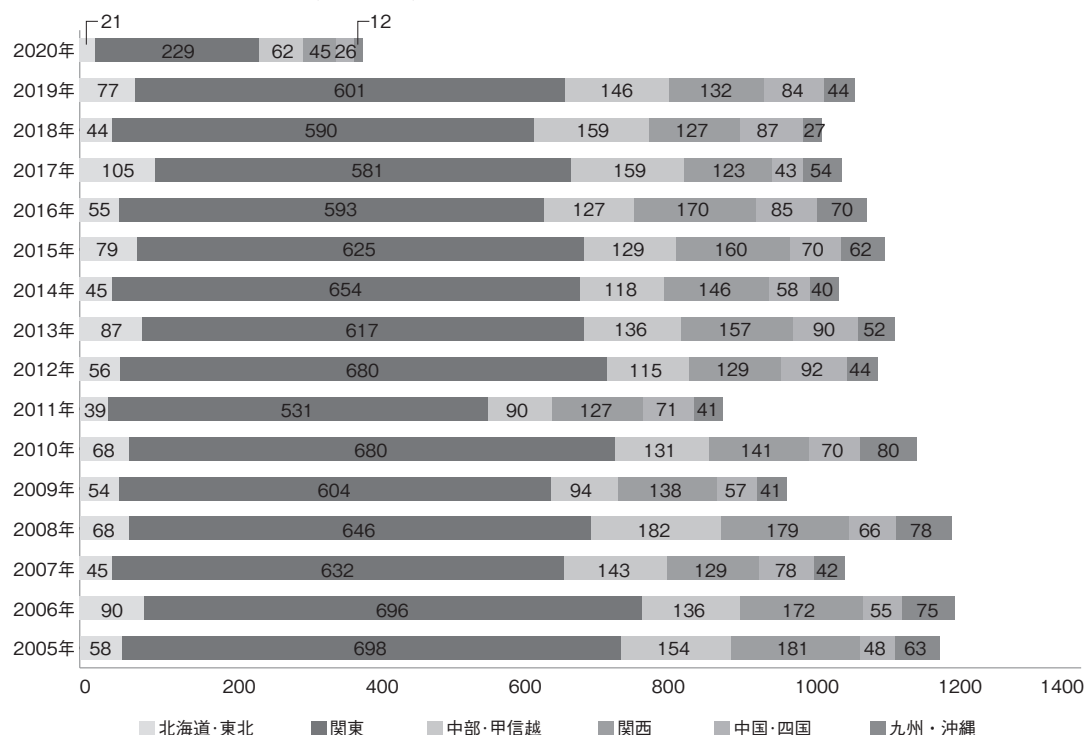


表12 2020年の会場別総上演回数（A.大規模会場で5回以上開催の会場。〔 〕内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数 ^{*1}	客席数 ^{*2} （席）
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	28	0	0	28	28	1,814
		新国立劇場中劇場	0	0	0	0		1,038
		新国立劇場小劇場	0	0	0	0		[358]
2	東京都	東京文化会館 大ホール	6	0	0	6	6	2,303
		東京文化会館 小ホール	[2]	0	0	[2]		[649]
3	東京都	Bunkamura オーチャードホール	5	0	0	5	5	2,150
3	神奈川県	昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・シヨウワ	3	2	0	5	5	1,367
3	東京都	日生劇場	5	0	0	5	5	1,330
合計/総上演回数		—	47 [49]	2	0	49 [51]	49 [51] / 133 [395]	—

*1 大規模会場の総上演回数は、併設する中・小規模会場の上演回数を含めた数字を〔 〕内に表した。

*2 各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。

トたちの発信力の強さなども相まって大いに話題を呼んだ。

一方で、オーケストラの定期など主要な演奏会でも、数多くの中止公演が記録された。アンドレア・パッティストーニ指揮による東京フィルハーモニー交響楽団のザンドナーイ

作曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》、セバスティアン・ヴァイグレ指揮、読売日本交響楽団による《ワルキューレ》、ジョナサン・ノット指揮、東京交響楽団による《トリスタンとイゾルデ》、アレクサンドル・ラザレフ指揮の日本フィルハーモニー交響楽団によるラフ

マニノフ作曲《アレコ》など、各オーケストラの音楽監督、首席指揮者、常任指揮者などが指揮する予定だった意欲的なプログラムがいずれも中止となっている。

(音楽祭での上演)

東京・春・音楽祭は、《マクベス》《トリスタンとイゾルデ》、ブリテン作曲《ノアの洪水》など、取り上げる予定だった複数のオペラ公演がすべて延期や中止となっている。このほか、近江の春 びわ湖クラシック音楽祭 2020 の《ジャンニ・スキッキ》、第25回宮崎国際音楽祭での《トゥーランドット》、北とぴあ国際音楽祭 2020 はリュリ作曲の《アルミード》が中止・延期となった。県芸術文化祭などを冠した上演がいくつかおこなわれたがオペラを中心とした大規模なフェスティバルは開催されなかったと言ってよいだろう。

7. まとめ

2020年3月以降は、公演を実施する前に練習のために集まることすら困難となり、オペラなど声を合わせる作品はとくに合唱稽古ができないなど、大きな障壁が立ち上がった。若手の歌手たちは、自粛措置により練習する場所すら確保できない事態に陥った。各地の声楽家団体、劇場や音楽堂等が映像配信への転換に奔走し、これまでにない手法による公演実施への試行錯誤が続いていった。これほどまでに強い制限措置がとられたことで、演奏家にも観客にも生の音楽会への渴望が広がっていく。そのため、再開時の演奏会で演奏者や観客たちが共有した空間の感覚は、忘れられないものとなった。

2020年後半には徐々に演奏会は実施されるようになったものの、2021年に至っても本格的な再開とはならず、大規模なオペラ公演において意図した演出が実現しているとは言い難い。いかに我々は人と人とのかわりあいを通じて、舞台をつくり、鑑賞してきたのかということを思い知らされたのだ。

一方で、何がおこなわれなかったのかを記録するという作業を進めるなかで浮かび上がったのは、中止が決定した公演情報は社会からすぐに消えていってしまうということだった。さらに企画の段階でチラシなどが世のなかに出る前、すなわち公演開催の発表の前に中止決定された公演に至っては、その情報すら世の中に出ることはない。

そのために、実際に失われた公演をすべて記録することはほぼ不可能だったと言ってよい。公的な補助金も関係して、舞台上演から無観客公演、さらに配信へと切り替える公演も多数あるが、公演の配信記録は配信のプラットフォームが多様化したこともあって、これらを全て捕捉することは難しい。

とはいえ、オペラ公演がコロナ禍でどれだけ失われたのか、あるいは実施できたのかを可能な限り記録することで、日本の、さらに世界のオペラ界が甚大な災害とどう向き合ったのか、後世に問いかけることこそが年鑑の役割だろう。今後も、そうした材料を整える作業を継続していきたいと考えている。

(本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。)